

「紫式部日記」の方法と浄土教思想・試論

広川勝美

1

「紫式部日記」とよばれるものは、寛弘五年から七年に至る間の、中宮彰子の敦成親王出生、敦良親王の御五十日を主たる内容として現存している。この日記が公的記録的な女房日記の性格をもつとされる所以である。そうでありながら、同時に、この日記は作者の私的な感想や事柄の叙述をあわせもっている。この公私にまたがる二重性格とでもいふべきものに「紫式部日記」の特質を求めることが従来からなされてきた。たとえば松村博司氏は、「この日記は、消息文の混入といわれる部分が介在することによって、構成的には記録の公的な∥女房日記的な部分と、作者自身の感慨・心境・閨歴などを記した感想的私的な∥隨筆的な部分とに二分することができるように見える」として、さらに、「両者は相交錯した姿において遺されているのである。そして作者の感想の中には、常に内省

的な孤寥の姿がしばしば描かれて、日記全体に深刻な文学味を与えている。そしてこれこそこの日記独自の文学精神といふことができるであろう^{註1}と指摘された。

ところで、問題は、親王出生をめぐる盛事を書き留めるという日記の主旨を夔質せしめると思われるほどに、私的な心情が相交錯しつつ位置を占めているのはなぜか、というところにある。そのことについて、「皇子誕生については、すでに道長自身日記をつけ、中宮職でも、公式の記録があるとするなら、女房の日記は彰子方の私的な記録として、それらとは趣向のかわった、すなわち、才能ある女房の独自の観察眼により、個人的色彩にいろどられてこそ、存在の価値が認められた^{註2}」と説く清水好子氏の見解がある。日記成立の事情を主家の要請による親王出生の記録ということに置く立場からみたばあいに氏の判断に従いたい。そうではあるけれども、視点を作者そのものの内面に移行させたばあいにいかなることになるのである

ろうか。日記執筆にあたっては、記録するという外発的要因とともに、親王出生という盛大な出来事を眼のあたりに見聞した作者の感動が喚起されたことによる内発的な動機が存すると考えられる。主家の栄華を叙述する、いわゆる公的記録の部分にも、記録者その人の感動がそのままに表出されることさえあるのである。加えて、その感動とうらはらに、それをくつがえすごとく、内省的な私的感慨がひきつづいて語り出される、というのが日記のありようであった。私事はいうまでもなく、公事にかかる記述までも、作者紫式部の内面をくぐりぬけることによって表現を与えられている。公的部分・私的部分とよばれる、そのいずれもが、記録者それ自体の心底を露わにさし示しているといえよう。そして、その両者に関するそれぞれの叙述の色調の違いは、対象の違いによることもあるが、作者の内奥にある問題にもとづくものであらうとみられる。いうところの、日記の二重性は、作者の精神構造の二重性に由来する、ということができないであらうか。親王出生の盛儀を記録すべき立場にいた紫式部は、自らの感動を基底において、中宮彰子を軸とする後宮世界の優美さとめでたさを日記の主題とした。それにもかかわらず、その中でふるまう自己をもう一つの自己が凝視するという分裂したわが身のありさまを同時に書き記さなければならなかった。紫式部の内部に、貴族社会の一員として貴族的情趣にあこがれる志

向と、それをその根底から否定しつつし、そこから脱却しようとする志向とが対立したままにみえるのである。紫式部は二つの相反する志向を、いわゆる公的部分と私的部分の両者に分けもたせて、というよりも分裂したままに形象しつつ、その相廻りの中にあつて、それらを統合する道程を探り出さなければならなかった、のではないのか。そのとき、日記文学の方法は、単なる記録の方法であるにとどまらず、むしろ、作者その人の生のありかたを模索する方法として立ちもどってくる。そして、その問いにせまる作者の現実認識の姿勢の根幹を形成していたものはとりもなおさず浄土教的思想であらう。私的感想にみられる深刻な内省的苦悩はそれによって裏打ちされているとみられるのである。栄華の記録としての「紫式部日記」が、作者の内実に立ちかえったときに、憂愁の念の濃厚な現世拒否の論理に色どられるという点に、この日記の特質がありはしまいか。

註1 松村博司氏「紫式部日記」（アテネ文庫）

註2 清水好子氏「紫式部論」（『日本文学』一九六〇年七月号）

2

「御有様などの、いとさらなることなれど、うき世のなぐさめに

は、かかる御前をこそたづねまあるべかりけれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘るるにも、かつはあやしき^{註3}。」

巻頭につづく、この一文には、作者紫式部の屈折した精神構造のありかたがすでに提示されている、と考えられる。中宮の御前において、憂き世の思いも慰められるようである。「よろづ忘るる」ということばには、当代の後宮の女主人公である中宮のもとにおける思わぬ深さの感動がこめられている。それはかねての本意にはふさわしくないことである。にもかかわらず抑えきれなかった心の動きが示されている。しかし、それほどの感動ではあるけれども、そこに全的に自己を投入しおえることはできない。激しい感動にゆりうごかされた自己を、「あやしき」こととして、すぐにもう一つの自己が冷徹に凝視する。

こうしたありさまが、この一段が指し示す紫式部の姿である。これによってわかるように、行為と内省、その絶えざるくりかえしに紫式部の苦悶がある。そのような紫式部の精神のありかたについて、秋山虔氏は「作者のひたすらに美にさそわれる、あるいは美を発見してゆく志向と、現実生きることの苦渋に目ざめる倫理的な志向とのせめぎあう矛盾的な人間構造が、ゆくりなくもここに絵体的な表現をとげているということ、そのことは、もはや式部の日記執筆のいとなみが、主家の期待や要請による日次記であるとか

いとかの次元をこえた、高度の個人的文学創造の領域に属してしまっているということにほかならないだろう」と指摘された^{註4}。氏のいわれる矛盾的な人間構造を示す紫式部の像は、その精神の極を相反する二方向にもちつつ、その間を不安定なままにたゆたっているとみられる。

紫式部の精神において対立する肯定と否定、讚美と批判との極点^{註5}は、「身」と「心」とがそれぞれに担うものとされていた。式部集五五の「数ならぬ心に身をばまかせねど身にしたがふは心なりけり」、同五六「心だにいかなる身にかかなふらんおもひしれどもおもひしられず」などは、そうした紫式部の人間観をうかがわせるのである。それは、今井源衛氏の「ことに自分自身——ひいては人間そのもの——を『身』と『心』という二元的存在と見、両者の相関関係の中に自分の具体的な姿を見出しているのは、驚くべきことかも知れない」という見解が抽出していることである。「身」——現実世界内存在と、「心」——理想世界内存在との懸隔に紫式部の苦悶があったといえる。そして、この二律背反的なありようは、日記全体を通して認められるのである。

先にみた日記の二重性という構成は、まさに、その「身」と「心」の相対立する世界の志向にかかわっているのである。「身」が安住しようとする現実的世界は、紫式部にとって藤原摂関制

貴族社会の現実には他ならず、日記にあっては、今まさにわが身を置いている宮廷社会そのものであった。そこにおける讚美と肯定の志向は、親王出生記録という責務と重なりつつ、いわゆる公的部分として表象された。それに対して、「心」があくなく求めてやまない理想的世界は、両極に分解してたわが身を含めて虚妄の現実を超越したところに定立しうるはずのものであった。この現実否定と批判の志向は、喜びと感動に影をおとすごとく行間に点綴される私的感想においてだけでなく、いわゆる消息文を中心とした私的部分に表出されたのである。紫式部は相反する想念を、なおも相反するままに、日記の二重性のうちに表現しつつ、その両極の狭間に自らの生を定立しなければならなかったのである。『事と心』といひ、『身と心』といひ『世と我』といひ、二元的な対立を立てて、この総合になやむのが式部の思惟傾向である。^註ということとは容認されよう。

「身」に対して「心」をもって生きることを願望しつつ、なおも、それはきわめて困難である。しかも、生身の人間のうちにある心そのものが、それほど鋭く、理想的世界内の「心」であることに耐えてはいない。日記にいう、「さも残せることなく思ひする身のうさかな」であるとともに、「なほ世にしたがひぬる心か」と自問しなければならぬのが実状である。そして、深部へ深部へと自己解

体の苦悩の淵におちこむのが紫式部である。その深淵における精神の営みの原点は「うつし心」の究明によって実態が表われると思われる。多屋頼俊氏はそれについて「彼女わ世俗のものに心お引かれないのでわなない。世間的な美が感ぜられないのでわなない。しかし彼女の胸の底にわ、そうした世間的なものに酔わなない、醒めたる心——うつし心が常にひかえていて、世間的なものに引かれようとする心お引きとめているのである。^註」と述べられている。おおむねの把握はこれに示されているといえるが、なお、考を重ねるために、従来からの註釈のうち、今、眼にふれえたもののなかから主なる見解を列挙すると次のようである。

1 このうつし心は現心にて其なきは物狂ほしきなり此もあまりころ行て物狂ほしきまなるを云なるへし（足立稱直氏「紫式部日記解」）

2 現心にて、いま我心の底に、おぼろげならず、深く思ひとりたる心をいふ。後々にも、かかる心ばへあまた見えて、この式部が心、ただ、仏の道にふかく思ひいりて、かかるまじらひなどは、このましからぬさまなれば、しか、仏の道に思ひいりたるうつし心をば引たがへて、御まへなるほどは、御ありさまなどのすぐれさせ給へるによりて、よろづうきこともわすられぬとなり。

（清水宣昭氏「紫式部日記註釈」）

3 たしかな心。正気。あまりに心ゆきて物狂ほしきさまなるを云ふ。(永野忠一氏「紫式部日記評釈」)

4 中宮の御前に居ればあまりの嬉しさに本心も失せて有頂天になるといふのである。(宮田和一郎氏「紫式部日記講義」)

5 沈んでゐる自分の現在の心をすっかりかへてしまつて。(玉井幸助氏「紫式部日記」)

6 現実の心。紫式部は、このうき世を思ひきつて出家して、仏道修行するのが現実の真相に目ざめた人間の態度であると考えようになるのである。(阿部秋生氏「紫式部日記全釈」)

7 平常の心。(池田勉氏「紫式部日記」)

8 現実の境遇、自己の運命に対して目ざめている平常の心とつてかわつて。(池田龜鑑・秋山虔両氏「紫式部日記」)

9 本心・正気の意だが、仏の道に深く思ひいらりたる心と解するはいかたであろう。式部が出家入道を希求せる如き意味の感懐を洩らすことは、この日記にも度々見えているが、なお直ちに「現心」即「菩提心」と断じ去る根拠とはなし難い。むしろ、この世は穢土ぞと思ひしみたる日頃の本心をさすと見るべきではなからうか。(池田龜鑑氏「紫式部日記」)

10 正常の心・平常の生活感情。(曾沢太吉・森重敏両氏「紫式部日記新釈」)

これらを見るとおおよそ次のごとくまとめられるであろう。

1 足立稻直氏説の系列……本心・平常心などの一般的語義を明らかにするにとどめて、その実態にまでたचीいたらないもの。

2 清水宣昭氏説の系列……仏道に深く思い入った心とみて、明らかに仏道帰依の志向があるとするもの。小室由三氏の「紫式部全釈」もこの立場をとる。

3 池田龜鑑氏の説に代表されるごとく、作者の内面に迫ろうとして、憂き世の思いのうち沈んだ心情をひき出してはいるが、なおそれと仏道精進とは同一ではないとするもの。

これらの三つの見方がある。一般的な意味内容を把握するものから、現実批判に至るもの、さらに仏道帰依へと深化したとみるもの、などである。紫式部の真情は、はたしてこのいずれの地点に位置するのであろうか。

もともと「うつし心」の語義は、「たしかなる心」「常の心」「正気」(北山溪太氏「源氏物語辞典」というにとどまる。吉沢義則氏「源氏物語新釈」索引によれば、十八の用例があるが、そのいずれも、右の語義の範囲内である。したがって、この限りでは、曾沢太吉・森重敏両氏の説かれるごとく、「平常の生活感情」ということになる。それはそれとして、次に問われるのは、紫式部の内奥に「現にただいま在る心」がいかなる性質のものであるか、ということだ

ある。このことについて、この頃の紫式部の心情を表出したと思われる「紫式部集」の歌をみると、次のようなことが散在している。「世のはかなき事をなげくころ」（集四八）「世を常なしとおもふ」（集五四）「この世をうしといとふ」（集五四）「身をおもはずなりとなげく」（集五五）「身のうき」（集五七）「うきことをおもひみだれて」（集五八）「うき世」（集五九）などである。無常の世に生きるわが身の憂きの思いが著しいといわなければならない。式部集において作者がこうした心情を吐露したのは夫宣孝の死の直後から宮仕えにかけての時期である。日記にいう「うつし心」もまた同質のものであるとみてよいのではなからうか。とりわけ、式部集五七の「はじめて内わたりをみるにもものあはれなれば身のうきは心のうちにしたひきていまこのへぞおもひみだるる」は出仕時の感慨であって、日記にひきつがれている心情と考えられる。つまるところ、紫式部の内面的感慨は、その集約としての「うつし心」の実態において、自らの境遇に思い入る沈鬱なものであった。すなわち紫式部は貴族社会の直中に生きてありつつ、「身」と「心」という矛盾相対する二つの志向の間に漂泊しながら、そうした自己の存在をも含めて、全てを憂き世の事とみてそこから脱却を希求していたのである。これが「うつし心」として、日記作者の心底に位置を占めているのである。そうした意味において、ここに厭離穢土の一念

「紫式部日記」の方法と浄土教思想・試論

をよみとることができよう。穢土の思いが、池田龜鑑氏説のごとく、なおも仏道精進と結びつかぬかどうかはしばらくおくとしても、少なくとも、作者が出世的な姿勢のうちに生の可能性を探り出そうとしていることは認められる。そのことにかかわったときに、「紫式部日記」は、単なる主家繁栄の記録にとどまらず、作者それ自体の生の模索の記録たりうるのである。

自己否定の極限は、しばしば、強烈な自意識をよびおこす。紫式部の場合もそのようである。

「かく、かたがたにつけて、一ふしの思ひいで、とるべきことなくて、過ぐし侍りぬる人の、ことに行くすゑのたのみもなきこそ、なぐさめ思ふかたに侍らねど、心すごうもてなす身ぞとだに思ひ侍らじ。」

これによると現在までの生涯は虚しかった。今後もそうであるだろう。にもかかわらず、というよりは、それだからこそ、かえって「心すごうもてなす身ぞとだに思ひ侍らじ」という強靱な矜恃がある。そして、負の極を正の極へと切りかえようとするとき、その可能性は自己の不安定な存在をその本質に至るまで、どれほど凝視しつづけるかにかかわる。その不安なり懷疑をいかに意識上に把えるか、ということに生の方向を探り出すことの一切のモチーフがある。それが身の上を書き記す日記文学の方法との出会いを必然的な

ものにするのである。つきとめないでいられないときに、現象は写実的精神の対象たる素材へと転化する。「紫式部日記」のばあいも、ここに、公の栄華の記録からわが身の生の記録への変質が用意される。そして、それをつき動かしていったものが、他ならぬ憂き世における「身」と「心」との分裂の不安に根源を置く「うつし心」であつた。

作者自らの感動の対象であり、慶祝の記録の対象でもある晴れの儀式も、ひとたび「うつし心」の想念を通してみられたときには、一切が作者それ自身の暗澹たる心象風景に変質してしまふ。

「行幸ちかくなりぬとて、殿のうちをいよいよよつくりみがかせ給ふ。世におもしろき菊の根をたづねつつ掘りてまゐる。色々うつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植ゑたてたるも、朝霧のたえまに見わたしたるは、げに老もしぞきぬべき心地するに、なぞや、まして、思ふことのすこしもなめなる身ならましかば、すきずきしくももてなし、若やぎて、つねなき世をもすぐしてまし、めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心の引くかたのみ強くて、ものうく、思はずに、なげかしきことのまざるぞ、いとくるしき。」

一条天皇行幸は道長一門にとつて、その権勢の確立に至る途上でも極めて重大な出来事の一つである。したがつて、それは、栄華の

記録に欠かせないどころか、その眼目でさえある。作者の筆致はその重々しさを伝えるにふさわしく事実を積み上げるたしかさですすめられていく。そこには紫式部の視線も動することなく確固たるものとして在る。そしてその存在の確かさは「老いもしぞきぬべき心地する」という感動となって結実する。その限りにとどまれば、晴儀の叙述にふさわしい。ところが、一転して「なぞや」以下、筆者個人の苦衷が語り出される。だからといって、紫式部は行幸を待つ土御門殿の華麗に異を唱えるに急ではない。むしろ、自らも共感をもってその場に身を置いているのである。しかも、その一方では、感動の強さと反比例して、その世界からはみ出さざるをえない自らを熟知しなければならぬ。したがつて、場面が晴れやかであればあるほど、作者の内面を通してみたありさまは対照的に暗さが際立つ。いうところの「思ひかけたりし心」は「うつし心」と内実において一つであろう。描きとられる対象の全てが、その心に引きよせられたときに、貴族の情趣に富む客観的世界から、反現実の主観的世界の表象手段にと転換するのである。行幸当日もその例外ではありえない。

「御興むかへ奉る。船楽いとおもしろし。寄するを見れば、駕興丁の、さる身のほどながら階よりのぼりて、いとくるしげにうつぶしふせる、なにのごこととなる、高きまじらひも、身のほどかぎり

あるに、いとやすげなしかしと見る。」

これは単なる同情ではありえない。つまるところ外界に仮託された作者の内面の流露そのものである。これらに認められるように、全てが自己に回帰して行くのが「紫式部日記」の特色である。作者の視線に捕捉された対象は、作者主体についての冷厳な批判となつてかえってくる。そうした内省的な自己回帰の性格は、この日記全体の方法として共通するのである。しかも、その自己自身が深刻な孤愁にもとづく「うつし心」なり「思ひかけたりし心」なりに規定されている。それが、描きとられる対象に作者主体を移入させていく媒介ともなったのである。「紫式部日記」の世界とそれを構成するものとしての「うつし心」の関連はそのようなことであつた。

註3 池田亀鑑・秋山虔両氏校注「紫式部日記」 本文引用は以下同じ

註4 秋山虔氏「紫式部日記の世界」(「源氏物語の世界」所収)

註5 南波浩先生「校本紫式部集」

註6 今井源衛氏「紫式部」

註7 西片但三氏「紫式部の観照と思索」(「国語と国文学」昭和

四年十月号)

註8 多屋頼俊氏「源氏物語の思想」

「紫式部日記」の方法と浄土教思想・試論

註9 南波浩先生の御教示をえて、「校本紫式部集」より引用

3

「日記は、作家が、自分が危険な変身にさらされているのを予感した場合に、自己確認のために打ちたてる一連の目印をあらわしている」ということは、平安時代の女流日記文学についてもあてはまる。^{註10}「蜻蛉日記」をはじめとする一群のものは、いずれもが作者個人の生活体験を通して抱かなければならなかった不安動揺と、そのための苦悩とを負っている。そして、その閉塞的な状況の中で、自らの生のあり方を探り求めようとしたところに日記文学の成立の要因があろう。先にみたごとく、栄華の記録であつたはずの「紫式部日記」もまた、それが作者の明らかな自意識と、現実でのゆき所なきによる不安からの転進の企図をもつがために、それら女流日記文学の系譜に同列に配置されることになつたのである。

日記文学は、一つの生活記録であるとして、その作者主体のゆきづまりの中から、見失なわれたあるべき存在を希求しようとする時点に出発点があつた。「紫式部日記」において、それは、現実的存在としての「身」をもつて理想的存在としての「心」に至ろうとする願望に始発する。しかし、紫式部の意識内容として、「身」といふ「心」という、現実肯定と現実批判の両相は、その基盤におい

て、貴族社会とそこにおける紫式部の存在のしかたに根ざしている。

紫式部は、貴族社会との疎隔を感じながら、貴族階級という一つのまとまりには連帯感をもっていた。それにおいて社会的存在そのものも成り立たない。紫式部は貴族階級の一員としてのみ生きていくのである。そして、その貴族性は、とりわけ、貴族社会固有の情趣のうちに發揮されていた。中宮はいうまでもなく、道長一家・同僚やその他の人々の言動に情趣を看取して日記に描き残している。ことに、日記にしばしばみえる「絵にかきたる」「物語にはめたる」ということはこめられた美的情緒的な鋭敏な感受性に把えられた描写にそれは表示されている。このように、貴族としての連帯をもちうるかぎりにおいては、紫式部は後宮を中心とする貴族社会の中に自らを存在させることができたのであり、そこから逃れることもできない。貴族階級という共同体が、少なくともそのときは美感をもって在った。日記の主題であった親王出生という大事に対して、記録者紫式部は集団の成員として直面している。そして、そこにもたらされる感動は、ひとり紫式部のもののみならず、その背後にある後宮全体との統一的なものとして喚起されたのである。けれども、同じ親王出生を「かかる世の中の光のいでおはしましたること」と記述したとたんに、自己の位置とのあまりにも大きい

隔たりを痛感しなければならぬ。「外粹としての連带的・同根的性格と、その内部において日一日と進んでゆく争い難い解体崩壊の感情の二重性格^{註11}」が、紫式部のみならず、貴族社会全般にのしかかっていたのである。階級分化が進行していたことは、日記にも記されている。親王宣下の日すら、同じ藤原でありながら、閥閥の争いのために、門流を異にするものは拜礼の列に加わらなかった。そして、そのような上層貴族の政争の陰に中下層民の生活はいよいよ不自由となり、困窮の一途をたどる。そうした事態は、「ひきはぎ」の出現として日記に露呈している。そうでなくてさえ、宮廷自体が華麗さとうらはらに、権謀術数のうずまく場にならなかった。それはとりもおさず、摂関制社会の構造につながっていく。紫式部がどれほど正当に認識していたかは疑問であるけれども、「よろづ忘るるにもかつはあやしき」と冷徹な内省の視線を向けなければならなかったのも、こうしたことに由来する。混乱の度を加える貴族社会の二重性が、そのままに日記に定着した紫式部の精神構造の二面性として反映されているのである。

したがって、紫式部の統一的主体の回復は、主観的感性的救いのなかに求められたとしても、それはひとときのなぐさめに終って、真の解決にはなりえなかった。あの中宮の「御有様」が「うき世のなぐさめ」であったにせよ、結局のところ、より深い憂愁のもとで

しかなかったことは、すでにみたとおりでである。分裂した自己の存在を再び統合するには客観的論理的認識が不可欠となるのである。紫式部の思想の実態が問われるわけである。

思想の領域において、この時代を代表するものは浄土教思想に他ならない。「紫式部日記」についても、反現実的な憂愁を軸とする「うつし心」もまた、浄土教的思想に導かれて、厭離穢土・欣求浄土の求道心に収斂されていくのではないか。日記末尾近くの次の一文は、それを考察する手がかりとなると思われる。

「いかに、いまは言忌し侍らじ。人、といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく経をならひ侍らむ。世の厭はしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖にならむに、懈怠すべうも侍らず。ただひたみにちそむきても、雲にのぼらぬほどのたゆたふべきやうなむ侍るべかなる。それにやすらひ侍るなり。年もはたよきほどになりもてまかる。いたうこれより老いばれて、はためつらにそ経よまず、心もいとどたゆさまさり侍らむものを、心深き人まねのやうに侍れど、いまはただ、かかるとのことぞぞ思ひ給ふる。それ、罪ふかき人は、またかならずしもかなひ侍らじ。さきの世しらるることのみおほく侍れば、よろづにつけてぞ悲しく侍る。」

紫式部は、身の置きどころのない不安を、日記の中に凝縮して呈

示しながら、それを人間存在そのものの不安定性として把握することによって救済の道筋を得ようとしているのである。浄土教思想はいうまでもなく、阿弥陀仏の救いを信じ、念仏により阿弥陀仏の極楽浄土に往生することを説いたものであり、当時において確固たる理念を与えたのは源信の「往生要集」であった。これは厭離穢土・欣求浄土を教えている。何よりもまずそのことが、貴族社会での様々な悲運に遭遇して無常を体得させられた人々の心情と結びついたであろう。「往生要集」は願生浄土の方法として諸種の実践行業を説き、その中でも「予が如き頑魯の者」にふさわしい行業は念仏の一門であるとしている。紫式部もまた、この「往生要集」をはじめとする源信の教えに大きい影響を受けていると考えられる。そして、自己解体をもたらす体験の一切をあげて、世の実体を悟って絶対的な浄土に揚棄することを願ったと思われる。

現実と理想の隔絶にあえず自意識は、ついには、その無力さが人間性の有限性の認識にと到達する。そして、貴族社会の矛盾によって余儀なくされた自己分裂の苦悩を、人間存在に負わされたどうにもならない宿世とするところに、宗教的世界へと転回してゆく契機がある。「自己が置かれている現在の絶望の状態は、すべて自己に原因しており、従って自分自身には、それを打破する力を欠如するという無力感・孤独感が、その最終的な救済を、浄土教に求めしめ

るのである」^{註12}という田村田澄氏の考察は、この時代における浄土教思想受容の事情を明らかにしていると思われる。紫式部もまた、ここに指摘された当時の一般的なものの考え方によりつつ、その人生なり社会なりをみつめているのである。現実執着と現実出離、身と心の相剋葛藤による人間性解体の悲哀は、実のところ藤原摂関制社会の矛盾に根ざすものであったけれども、その状況に追いこまれたのはわが身に負っている前世以来の宿業の結果であるとみる意識が、浄土教思想にうら打ちされて、内省的・懐疑的な資質とあいまって深められる。その点に紫式部の認識の特質がある。

紫式部の自己認識のしかたは「こよなく立ち馴れにけるも、うとましの身のほどとおぼゆ」と記すことによってもうかがい知られる。讚美と肯定の対象であると同時に、それ以上に批判と否定の対象であったはずの、宮廷世界から離脱することは容易でない。それどころか、かえって、そこに埋没していく。紫式部の「身」と「心」の対峙する不安の根本原因はここにあった。紫式部は、この悲哀を「身のほど」のうとましさの結果として運命的に受けとめることによって承認しようとする。ここにも紫式部の思惟の一特質がある。この「身のほど」の認識において、解体していく自己をわずかにつなぎとめる方途を求めようとしたといえる。阿部秋生氏によれば『身のほど』——わが身に備はっている格——いはば受領の

家の娘として生まれたといふことも含めての宿命的なものによるのだと解釈してゐるのである。それだけに、かういふことをいふ時には、それが救ひがたい致命傷として、何か絶望的な響きをさへ帯びて聞えるのである^{註13}——ということになる。自らの不安を、「身のほど」に集約して示される人間存在そのものが宿命的に背負っている問題として理解したときに、紫式部の苦悩とその救済の探求は、現世のみならず三世にわたることがらとなってくる。浄土教思想との接点はこのことにあるといえる。世の不安・無常を痛感させるさまざまな体験と認識とが、人間存在を超えた阿弥陀仏の救いを求めるものとしたのである。

紫式部が宿命的な「身のほど」として意識した不安定さ不自由さは、もともと、当時の貴族社会全般に共通してみられるものである。すなわち、貴族社会そのものの不安定性をはらむ摂関体制それ自体が天皇を頂点とする血縁関係にもとづくものであるのをはじめとして、貴族社会に存在する人々の社会的経済的な栄達没落は、それぞれ出自や性の違いなどによるはずの「身のほど」によって一切がすでに決定されていることであった。このような、社会的地位の固定化が、人為の及ばない宿世の結果であると受け取られたのである。宿世というものは前世において為した業の応酬として人々を支配しているのであって、人間の意志の力によって動かしえない

ものとされる。しかも宿世の因縁は予知することが不可能である。

そして、人々の多くは、貴族社会において避けることのできない種々の失望と悲哀とによって、自らの「心憂き宿世」の重圧を思い知る、ということになる。「さも残せることなく思ひ知る身のうさかな」と嘆かずにおられない紫式部もまたその枠外ではない。そして動かしがたい宿世を担いつつ、その罪障の消滅のために道を求めていた。それが、日記の終わり近くに到達した地点であり、その営みの中核となったのが浄土教思想であった。現実社会への批判と絶望とが浄土教思想に領導されつつ、ひたすらな求道心となり、「世の厭はしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにて待れば、聖にならむに、懈怠すべうも侍らず」という心境になる。ここに至って、不安と動揺に基礎を置く「うつし心」は、厭離穢土・欣求浄土の求道心としての帰結をみるのである。

註10 モーリス・ブランショ「文学空間」

註11 今井源衛氏「源氏物語」(岩波講座日本文学史所収)

註12 田村円澄氏「日本仏教思想史研究 浄土教篇」

註13 阿部秋生氏「源氏物語研究序説」

4

栄華の記録に、その背後から憂愁の想念をただよわせ、ついに人生的問いの記録に変質せしめた「紫式部日記」の形成は、藤原氏専制の貴族社会の現実と作者主体との間にあるいやしがたい矛盾についての自覚を基盤としていた。深沢三千男氏のいう、「式部のいわば場違いさを感じさせる深刻ぶりはむしろ貪婪に隠れた苦悶を蒐集し共鳴して止まない。そしてそれらの苦悶が栄華という八現実の裏面に密着し、栄華の重みそのものが必然的にその支え手に課する苦悶への忍耐の力エネルギ自体が栄華相維持の力エネルギに転化する、栄華相と苦悶との相即不離の機構が露呈されているのを知る事ができよう」との見方は、氏のいう栄華の重みの構造を端的に指し示している。しかしながら、栄華相と苦悶の相即不離の機構を、紫式部は「栄華相の発現」のためにということではたして容認しえたのであろうか。栄華と苦悶とは表裏一体の関係をなしつつ、対立相剋する二極に作者主体を分解したのではなかったのか。そして、その苦渋が仏教のいう人間存在の罪障の認知へとつき進んでゆくところに「紫式部日記」の精神の真相があったことは前述のとおりである。

現実社会への定着と飛翔、二つの相反する精神の間において、それをどのように統一して不安動揺より自らを解放するかが、日記の

最初からの紫式部の課題であった。そしてその解決の方向は、当時の代表的思想である浄土教思想ときわめて密接なかわりをもつことによって見出されようとしていた。浄土教思想が歴史社会の現実とそこに生きる人間についての作者の認識の論理となっていたのである。

日記という散文学の方法によって、生の新たなあり方を定立しようとする要求をもつに至った紫式部は、それを貫徹する思想において浄土教思想に到達したのである。しかし、そうはいっても、紫式部は直ちに出家することによって救われるとは考えてはいない。「ただひたみにそむきても、雲にのぼらぬほどのたゆたふべきやうなむ侍るべかなる」という迷いを、求道の決意にひきつづいて記しているのである。この逡巡はいかなることを語っているのであるうか。紫式部の文学と浄土教思想の関連についての問いかけがここに提起されよう。

紫式部は「心から彼岸に憧れ、そこに救われることを確信してゐるのとは全く事情を異にして、仏道精神の心をかためる反面、又これを深く凝視せざるを得なかったのである」と^{註15}みるべきである。それは何故であるのか。一つには幼い娘を抱えての出家にためらいがあったのであろう。そのことによって、低迷は深くはなつたではあろう。が、そこに根本的原因があるとは認めがたい。娘をはじめと

する現世の絆のもとにあって、紫式部はなおかつ求道に徹しようとしている。「心深き人まねのやうに侍れど、いまはただ、かかるかたのことをぞ思ひ給ふる」と重ねて仏道帰依の決意を記しているのである。それゆえに、紫式部のいう「雲にのぼらぬほど」の迷いは、現世への執着のために出家の志が鈍って「なまうかび」（源氏物語「帯木巻」）になるのを恐れたためもあるが、より大きくは、自らの生の根源そのものの不安定さへの認識によるものと考えられる。まさにそれは「うとましの身のほど」として紫式部を求道へとかりたてたものであった。今、その重庄がようやくそこに解決を得ようとした仏道帰依すら不安にさせる。「罪ふかき人は、またかならずしもかなひ侍らじ。さきの世しらるることのみおほく侍れば、よろづにかけてぞ悲しく侍る」というように、おのれの宿業のために極楽往生ができるかどうか疑わしいのである。宿世の因縁は前世と現世との因果関係だけでなく、必然的に来世にも及ぶものである。しかも、人間が知りうるのは現世のみであるから、あくまでもそれにもとづいてのみ前世を推量し来世を予知できるということになる。紫式部の場合、貴族社会の中で主体を立てて生きようとすべするほど、自己分裂の苦悩を避けえなかったのであり、その絶望的悲哀を通して自らの宿世を痛感しなければならなかったのである。それゆえに、憂愁が深ければ深いほど、宿業の罪の重庄をより

深刻に思わせられる。その結果、来世にかけた阿弥陀仏の救済さえも成就しそうにないという絶望感に陥らざるをえなかった、といえる。

紫式部はその生きる貴族社会の現実^{註15}に絶望し、さらにそこからの救済の道として仏の慈悲にあずかることにも絶望する。まさに二重の絶望の中にのめりこんでいかざるをえないのである。そうではあるけれども、浄土教思想への回心の契機となった憂愁の内実についてはなおも検討しなければならない。紫式部は、貴族社会において満たされぬ心を抱き、その行き所なきの解決を仏道に求めてはいた。しかし、それは当時の人々の宗教的態度と同様に「厭わしい現実とは人間の絶対悪と云うような倫理的なものではない。謳歌さるべくして満し得ないその現実が忌むしいのである」^{註16}ということに基底を置いていたと考えられる。「うとましき身のほど」といい、「つたなき宿世」といったとしても、それは、貴族社会における存在への絶望と悲哀とを内容としてもっているにすぎない。宗教的回心へとゆり動かしていった「身」と「心」の対立もまたわが身を置く貴族社会の現実と、求めてやまない理想の世界との疎隔感に由来していた。そこでは、「身」即「心」、「煩惱」即「菩提」の宗教的諦念による救いは未だ望むべくもなかった。つまるところ、此岸において得られないものを彼岸に求めようとすることに求道の真意がある。

る。本来それは宗教的心情というよりは、貴族社会の場において、人間性のあるべき姿を確立する方向に進むべきはずのものである。しかも、それが本質的に人間性の絶対否定に立脚する宗教的思想において道筋を求めねばならなかったのである。家永三郎氏は「中古の時代思潮の内に生じた彼岸への志向は、然しながら、真の彼岸へ投婦すべく猶頗る遠いものがあつたのである。彼等は浄土を求めながら、その所謂浄土とは真に此岸と絶対の否定を隔てて相見る彼岸ではなく、むしろ此岸の理想的形態を彼岸に投射させることにより、現実世界内に擬想的に構出せられた浄土の幻影であつた」といわれている。そうであるかぎり、いうところの道心とは、阿弥陀仏の慈悲による往生浄土を欣求するというよりは、貴族社会の矛盾に原因する悲哀からの脱却を主たる意図としていたと考えられる。そのとき、真の意味で求められているのは人間の生きる現世を否定しつつした彼岸にある仏土ではなく、もともと人間の場においてこそ求められるはずの、全体的人間性を定立すべき所としての新たな世界であるといえよう。

このように、この時代の浄土教的思想は、きわめて現実主義的な立場において求められていたのである。そしてその特異さにこそ、浄土教思想と文学との接点があるにちがいない。しかも浄土教思想の受容者の中心となつた中下層貴族、とりわけ知識人たちは、同時

に平安時代文学の作者ともなることによって、浄土教思想と文学とのかかわりが作者の主体内部の問題ともなったのである。紫式部についてもまた同じことが認められるのである。自己の存在をその本質に至るまで把握して、その解体をとりとめようとする写実精神にもとづく日記文学の方法と、その論理的帰結として到達した浄土教思想とは、ともに摂関制社会のもたらす矛盾からの脱却という共通の課題を背負っていたことが確認できる。「紫式部日記」がその認識の論理を浄土教思想のうちに求めようとしたのも故なしとしない。しかしながら、その両者が、本質的機能において相違するものであることは明白であった。浄土教思想は、人間存在の有限性にもとづくのに対して、文学はその絶対性に基礎をおくからである。その対立相違に、再びもたらされる方位喪失の不安がある。紫式部のばあい、人間性の無限の可能性に向っての営為を文学の方法によつてはたそうとするとところにその主要な欲求があったようにみえる。それと浄土教思想との埋めがたいずれが、求道に自己の全てをかけるのをためらったそのことに表われていたのではなかったのか。結論的にいえば、紫式部の文学は、浄土教思想に支えられつつ、しかもそれと対立矛盾する中から生成し位置づけられたのである。それがはたしていかなる質のものと成りえたのであるかが問われよう。しかし、そこまでくると、「紫式部日記」の世界を超え

て、「源氏物語」の世界に入りこんでしまうことになるのであろう。

註14 深沢三千男氏「栄華の重み―紫式部日記と源氏物語の一接

点―」〔文学〕一九六七年五月号)

註15 森岡常夫氏「源氏物語の研究」

註16 井上光貞氏「浄土教の成立」(日本歴史学講座所収)

註17 家永三郎氏「上代仏教思想史研究」